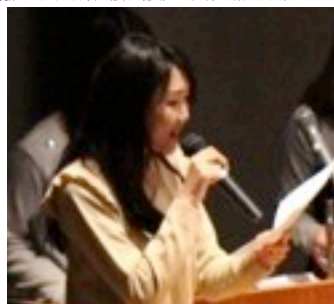




月歩学歩



「げっぼがっぼ」と読んで欲しいが、その意味は、“月日を歩き、学んで歩く”ということ？



特集

学びの成果 発表会

【発表は二部構成となっており、ゼミ単位のステージ上での発表と、個人のポスター発表で構成されました。今年度のステージ発表は、「ゼミの一年間を振り返って」という全体共通テーマを設定したうえで、各ゼミで発表の内容を話し合い、それぞれが内容に見合うサブタイトルをつける形となりました。】

(金 瑛珠) 2-5P

その他の内容

- ◆ 学内ゼミ合宿行われる！ (由田 新) 6-7P

キャンパス・ライフ

- ◆ 「現代社会論」合同発表会 (石川 優子) 8-10P
- ◆ 「保育・教職実践演習」を終えて (石井 章仁) 11-19P

特集 「学びの成果発表会」

記：金 瑛珠



保育方法演習 担当教員ゼミ名	ゼミのテーマ	学びの成果発表会 「ゼミの一年間を振り返って」 発表サブタイトル
箴ゼミ	実習体験から描く 子どもの暮らしと子どもの姿	実習の振り返り
由田ゼミ	遊びに対する保育者の援助に ついて考える	遊びについて考える
山野ゼミ	保育を社会的養護の現場から 考える	_____
深谷ゼミ	言葉を通して自分を見る。保育を 見る。人との関わりを見る。	私たちが活字をもって 乗り切ったゼミ
金ゼミ	保育における“子ども理解”と “援助”について考える	自分のことばで語り合う
小久保 ゼミ	エピソード・レポートで 一人のこどもを描く	一年間の取り組み
田中ゼミ	保育における身体表現活動の探求	これまでの歩み、これからの歩み ～自分を知る、相手を知る～
石井ゼミ	子育て支援子育て支援	たいむでの学生企画活動を行って
伊藤ゼミ	保育者とは社会の中でどのように 生きる大人なのかを考える	相手の話に耳を傾ける、相手を知る



今年度で4回目を迎えた「学びの成果発表会」が、2月13日（木）に蘇我勤労市民プラザにて行われ、無事終了しました。

今年度の「学びの成果発表会」は、保育方法演習（通称・ゼミ）での1年間の取り組みを振り返り発表する場でした。今年度の保育方法演習は、9コース開講されました。コース毎に、様々な特徴がありますが、一年間、教員と少人数の学生が、毎週、2コマ（90分×2）の時間を共有してきました（授業の内容に応じて2コマ以上行う場合もありますので、最低2コマ、と言うべきでしょうか）。そして、多くのコースで最終的に一人一人が卒業レポートに取り組みました。当日は、そのレポートの一部を、1枚の模造紙にまとめ、発表をしました。また、卒業レポートは課されていなかったゼミの学生たちは、模造紙上に自分の学びをまとめ、発表をしてくれました。

例年通り、発表は二部構成となっており、ゼミ単位のステージ上での発表と、個人のポスター発表で構成されました。例年、ステージ発表はタイトルを教員側で設定していましたが、今年度のステージ発表は、「ゼミの一年間を振

り返って」という全体共通テーマを設定したうえで、各ゼミで発表の内容を話し合い、それぞれが内容に見合うサブタイトルをつける形となりました。

ここでは、私のゼミのステージ発表までの準備をご紹介します。

- ①全員で一年間一緒に行ってきた内容を、ファイルや資料を見返しながら思い出す。
- ②自分たちが一年前、一年生として発表会に参加した時のことも思い出し感想を出し合い、では、自分たちはステージ上で何を語るべきかを真剣に話し合う。
- ③その話し合いの中で、学生に問われ教員である金がゼミで何を大事にしてきたのかを語る機会を得る。
- ④「自分のことばで語り合う」というサブタイトルをつけ、発表に向けての具体的な準備を行う。
- ⑤ゼミでやってきたことの、どこをどのように発表するかを決める準備に予想より時間がかかり、見ている教員の方がハラハラする。
- ⑥最後は分担をし、一人ひとりが自分で話す部分の言葉を当日までに用意することとし、各自のポスター作りに移る。

この作業を、私のゼミの学生は、発表前日に一気に行いました。それまでは、各自が自分のレポートに取り組み、前週とこの日の2回に分けて行われたゼミレポートの「ゼミ内発表会」2日目と並行させる形で準備を行いました。時間的にはかなりタイトでしたが、ゼミ最終日に、学生たちが1年間のゼミを振り返り、自分たちの言葉で発表の準備をしている姿はとても頼もしく思えました。

また、今年度は、研修生たちの発表もありました。研修生1期生である5人の卒業生は、現場で一年間を通じて保育をしながら、学内で定期的にスクーリングを行い、県内外の保育現場にも見学に行き、多くのことを学んできました。3月には研修先の方々をお招きし、一年間の学びの成果を報告する会があります（*編注：3月8日（土）「研修生 学びの成果報告会」）ので、今回は研修生にとって、途中経過を発表する場となりましたが、在学生にとっては良い刺激になったのではないのでしょうか？

それぞれが、この日を一つの区切りとして、発表の準備を進めて行った「学びの成果発表会」でした。

そして、1年生の姿としては、積極的に質問をする姿、ポスターをじっくり読んでいる姿、先輩に憧れを抱き、交流している姿など、微笑ましい姿がある一方で、内容にあまり興味が持てずにいる姿も見受けられました。

現1年生と、来年度はどのようにゼミを作り上げていくことになるか、また新たな未知の世界にワクワク・ドキドキする自分自身がいたことは否めません。

最後に、2年生の皆さん！

1月・2月は、様々な授業の発表会が重なって、大変だった姿を我々教員も目の当たりにし、反省しました。来年度は、今年度の反省を生かし、改善していきます。

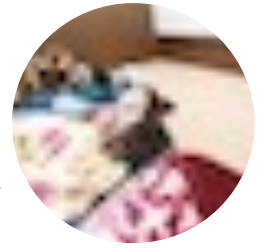
発表会、お疲れ様でした！



▲次ページからは、この「学びの成果発表会」に向けた由田ゼミの取り組みです！

学内ゼミ合宿行われる！

由田 新



今回の月歩学歩では、「学びの成果発表会」が特集されていますが、その周辺の話として、保育方法演習B（通称“由田ゼミ”）の“卒レポ”合宿の報告をしたいと思います。“卒レポ”とは、2年間の学びをまとめる集大成のレポート「卒業レポート」のことです。要するに、ゼミの卒業レポートをまとめるために学校で合宿を行ったということです。

何年か前から、ゼミの学生たちに「卒レポ合宿しない？」と提案していたのですが、なかなか実現せず、今回が初めての実施となりました。ゼミの全員が参加ということはかないませんが、有志6名が参加しました。家だとレポートをやらなくなりそうだからという学生から、卒業前の思い出づくりというような学生までいたかもしれません。参加動機はともかく、“お金をかけずに”をモットーに、2泊3日、とにかく学校で生活してみました。2月の初旬のことです。食事はもちろん、自炊。卒レポで頑張るのだから多少はつくってあげても...と思っていたのですが、学生たちは私の意

に反して自主的に自分たちで買い出しにいき、食事を作りました。けっこう自立しているではないですか！

教員があまり口出しする余裕がなく、昼は1年生の実習巡回に出かけてしまったりしてずっとつき合えなかったのも結果的には良かったのではないかと思います。一日の生活の中心はレポートの執筆です。パソコン室に籠って、各自がレポートと向き合います。困ったことがあれば、自然と仲間と話す関係が生まれたようです。楽しみは息抜きに話すことと食べることでしょうか。自分たちでうまく時間を配分し、進めていました。

学生にとってどんな時間となったのか...。ゼミ合宿に参加した武井香央理さんは、次のようなコメントを寄せてくれました。

.....

「雪が降るような寒い日、ゼミ合宿は始まりました。卒レポのテーマが決まらずにいた私は、この機会を使って仕上げようと思い参加を決めました。

合宿では、パソコンとずっと向き合っているだけではなく、皆で買い物を

したり3度の食事を自分たちで作りました。夜はゼミメンバーと由田先生を交えて交流を深めたりお互い励ましあったりしていました。そんな時、詳しくは相手のプライベートに関わってしまうので言えませんが、合宿中に自分と同じようなことを経験した人がいました。その方の話を聞いたり、自分の意見を話すことで過去の自分を振り返るきっかけとなりました。また、そのことは自分にとっての課題なのではないかと考え、そのまま卒レポに活かすことができました。今までレポートが書けなかったのが嘘のようでした。

このゼミ合宿を通して、普段のゼミ活動以上の関わりになったと思います。私は卒レポに繋げることができたのですが、他のメンバーもそれぞれ何かを得ることができたのではないかと思います。“楽しい”だけで終わってしまうようなものではなかったように思えます。生活を共にすることで関わりも深められていったのではないかと思います。」

.....

武井さんは、それまで書いてきた相当量の文章を全て捨て去り、新たな視点からあつという間に書き上げました。仲間とのやりとりから方向性がしっくり見え、自分の中で整理がついたからだと思います。他の学生も互いに刺激し合い、卒業レポートが随分捗ったようです。

そして、武井さんの文章からも伺えると思いますが、この合宿は単にレポートを書き上げるというもの以上の成果があったと思います。それまで、ゼミの中で一緒に話はあるけど、それ以上でも以下でもないという関係の学生たちが、一気に近づいたような気がします。本音を語れるような人間関係の深まりもあったようです。本当はもっと早い時期にそういうことが起きていたらよかったです。そううまく行くわけでもありません。この時期だから、ということもあるかもしれません。

ちょっと不便な状況の中で、時間だけはたっぷりあり、何か同じ目当てがあつて、自炊をして生活をともにする。そういう状況があれば、人はそれまでと違う関係をつくったり、学び合ったりする。そう思わせる3日間でした。

もちろん、ここでの成果が「学びの成果発表会」に活かされたのは言うまでもありません！

さて、1年生のみなさん、学校はちょっと不便ですが、その気になると泊まることができます。“同じ釜の飯を食う”体験、やってみませんか？



キャンパス・ライフ

「現代社会論」合同発表会

石川 優子

「現代社会論」は、2年次に開講する一般教養科目で、今の社会を様々な角度から学ぶと共に、社会で生活する自分自身にも目を向けることを目的としています。一つのテーマで学びを深めていく〈各論〉と、全体で学びを共有する〈総論〉を行ったり来たりしながら1年間学んできました。

今年度、各論は8コース開講しており、テーマは次の通りです。

- ・日本の不平等を考える -若者のワーキングプア/子どもの貧困-
- ・芸術を教育・福祉へ
- ・消費生活と手しごと
- ・子ども家庭福祉
- ・現代社会と群れの暮らし
- ・現代社会と都市
- ・現代社会の中の犯罪 -同じ社会を生きる者として-
- ・日本の伝統芸能に学ぶ

4月にそれぞれのコースに分かれて、フィールドワークも行いながら1

年間、学びを進めてきました。その成果を1月15日と22日の2日間に渡り、「現代社会論で学んできたこと」を報告しました。この2日間は、次年度の自分の学びをイメージすることや、共に考える機会とするために、1年生との合同授業として行いました。また、今年、とつても特徴的だったのは、5年前の卒業生2名が1年間各論に参加し、学生と共に学んでいたことです。その2名にも1年間の学びを発表してもらいました。ここでは、その現代社会論の報告会に対する学生の感想を紹介します。

.....

〈2年生〉

・どのコースも答えはないと思った。しかし、考えることは大切。現代社会を生きる人間として社会を知り、考えることは最も重要なことだと感じた。どのコースの内容も日常生活ではなかなか学べない・体験できないことだと思う。そのことについてわかっていないのに無理に答えを出す必要はないん

だと、あるコースの発表で感じた。私たちはどうしても答えを求めてしまう。分からないことは、一旦分からないで良いのだと思った（考えないというわけではない）。（江原 愛美）

・学生のうちにたくさん考えてモヤモヤしている今のこの気持ちを忘れないようにしようと思いました。（卒業生の発表から）社会に出ればつながることもあると聞いたけれど、それは、今のうちにたくさん考えているからこそ起きることだと感じました。2年間、考えてきたことが無駄にならないよう、今、引っかかっていることなど忘れないようにしようと思いました。（島 綾音）

・全てのコースの発表を聞き終えて、それぞれ違うことを獲得していつているように見えるけど、実は“自分を見つめなおす”ということに気づくことが大事だったのかな、と感じました。また、自分の知らない世界を知ること、他者を知ることにつながっていくのかな、と思いました。他者を知るために、自分から様々な体験をしたり、未知の世界に飛び込んで行ったりすればもっと他者を知るために必要な引き

出しが増えていくかもしれないと思ったし、まだまだ自分はその引き出しが少ないことに気づかされた。（武藤 萌花）

・私は一番、東さんと宗川さん（卒業生2名）の話が印象に残っています。私は“現代社会と群れのくらし”のコースで、自分について、他者について考えてきました。話の内容が似ていたこともあるからだと思います。（中略）2年生にはこれから社会に出て他者を気遣うこと、相手の気持ちを全部わかることはできないけれど、気持ちに寄り添うこと、考えることはできるから頑張ってもらいたいと言われ、これから社会に出る不安な気持ちはあるけれど、2人の話を聞いて自分もそういうことを誰かに伝えられるようになれば良いなと思いました。（與羽 麗那）

<1年生>

・発表を聞いて、まだ自分の学びになっていないことに対して、学びになったとまとめる必要はないと気づくことができた。また、すぐに学びとなるのではなく、モヤモヤとして残っても時間やいろんな経験の後に学びになるということも知れた。（安達 琴子）

・2年生の発表を聞いて、それぞれのグループで学んだことが全く違って、とても驚きました。そして、発表全体を通して、自分の心に変化があったり、深い学びをした人もいないけれど、中には「学んだ」と言ってもなんとなく学んだと言っている人もいるような気がしました。かと言って自分自身が普段「～を学んだ」と言っているだけでも、それが本当に何かを得たのか、と言われると、正直よくわかりません。これからの授業では、本格的に自分が何を得られたのかが、自分で分かるように取り組みたいと思いました。（森田 真耶）

.....

「現代社会論の学びは、必ずしも即効性のあるものではない。ボディーブローのようにじわじわ効くものかもしれない。ここでの学びの意味を自分なりに見つけられるのは、3年後かもしれないし、5年後、10年後かもしれないし、もっと先かもしれない。」

これは現代社会論の〈総論〉を担当する植野先生が時折話されることで、スタッフの中で共通に思っていること

です。今回、社会に出てから気づくこともあることを、卒業生2名が自分の言葉で語ってくれたこと、そして、各論の中で必死に学んできたことを整理してみたけれど、言葉にならずまとまりきらない思いがあったことをそのまま表現してくれたことなどが、とっても大きかったのだと、感想を読み、感じました。しかし、今回の報告会、参加していた学生はわかっていることだと思いますが、1年生の森田さんが感想で言うように、真剣に取り組んだのか、とりあえずやればよいとやり過ぎたのかが、顕著に見えたように思います。1年生も2年生も、今回の授業で、考えたことを引っかかりとして、持っておくのか、それすら忘れてしまうのかは、自分次第ではないでしょうか。その小さな引っかかりが、時間をかけて学びとなることを、私は願っています。



「保育・教職実践演習」を終えて

石井 章仁

1. 保育・教職実践演習について

この授業は、これまでの2年間を振り返り、整理し、就労に向けて必要な知識、技能、体験について、学生一人ひとりの“良さ”や“課題”に応じて実践し、深め、まとめていくことを目的としています。その手掛かりの1つとして、実習を出発点とし、それぞれの良さと課題を自覚し、良さを伸ばし、課題をどうカバーするかを考え、「こども臨床学」「保育者論」とも連動させながら、取り組んでいく授業です。

授業は、後期、月曜日に実施し、それぞれの希望から3つのコースに分けました。

・現場に出るコース

担当と課題を確認し、目標を定めた後、実践を行う現場（保育とは限らない）に出てレポート（エピソード記録等）を作成する。学内での振り返りを挟みながら現場で学びました。成果は、実践のまとめを発表を行いました。

・これまでの実習をまとめるコース

これまでの実習をまとめ、それについての考察をまとめる。そのなかで自身の良さや課題に気づき、それについてどう取り組むかを個人やグループで確認しました。成果は、実習のまとめレポートの作成およびポスター発表を行いました。

・基礎技能を高めるコース

最低限の現場で使える基礎技能をマスターするとともに、人と協同し「Plan-Do-Check-Action（PDCA）」の過程を学ぶコース。模擬実習（部分実習）では、Gで1つの活動を創る経験をし、事前のロールプレイ及び事後のビデオでの振り返りを行いました。また、現場で役立つ・実践に役立つノートの作成（導入・活動他）もあわせて行いました。

2. 2年間の自身を実習を中心に振り返る

今回は、「これまでの実習をまとめるコース」における成果を、Oさんの実践を通して紹介します。

（1）実習間のつながりを見出す

Oさんは、1年生の初めての实習（教育実習(幼稚園I)）で、自分の側からしか子どもの気持ちを考えられていない事に気づきました。しかし、保育所での実習

(保育実習I)で保育士の目を気にしてしまい、消極的になってしまいました。施設での実習(保育実習I)や2年生の幼稚園での実習(教育実習(幼稚園II))では、積極的に関わったりする様子が窺えましたが、2年生夏の保育所での実習(保育実習II)で、再び不安を感じてしまったようでした。その不安は、低年齢児の保育の理解が難しかったり積極性が出なかったりすることで、「自信がもてた部分もなくなってしまい」と、自信の喪失にまでつながってしまっていたようでした。

しかし、Oさんは、「今までのこととつなげて考えることができたのはよかった。子どもの気持ちを考えることを常に頭に置いてかかわりをもった」と、これまでの実習を継続的に考え、原点に戻るような思考を持つようになっていきました。

実習で観えた自身については、「常に不安がっている。でも全部、真剣に取り組んだと思う。継続したり日々の積み重ねで徐々に自信がもてる(誰かに言われて)。普段の生活と重なる。自分自身と向き合うことが多く、とてもつらくなる。良さがあまり分からない。」と、不安は残しながらも、自信が持てた部分も大切にしようとしていることが窺えました。実習間のつながりの中で、継続して自身の課題に直面することは、重要な要素となることがここから分かります。

■Oさんの実習ごとに行ったまとめ 「わたし」の特性・変化

□ 教育実習(幼稚園I)

全部初めてのことで、レポートも全然書けなかったけれど、月1回幼稚園に行くことができ、とても楽しみだった。子どもに会えることがうれしかった。自分側から見た子どもの姿しか考えられていなくて、後から思い返してみるとその子の気持ちが少しわかったりしたことから、子どもの気持ちを考えてかかわることが課題だと思った。

□ 保育実習I(保育所)

園の厳しい印象を自分の中で強くもってしまい子どもとのかかわりより保育者の目とかを気にしていた(特に乳児クラス)。実習全体を通して積極性が課題となり、積極的に子どもとかかわることはどういうことか考えたりした。自信を持って行動することができなくて「変わらないと」とすごく思いながらの実習だった。

□ 保育実習I (施設)

障がいを持つ人とのかかわりに戸惑いを感じたけれど、少しずつコミュニケーションがとれるようになって実習していて、人として大切なことを本当に色々学び考えることができる時間だった。職員の方ともお話ししてくなかで、様々な視点で物事をとらえる大切さを知った。利用者さんを「障がい者の」としてではなく「○○さん」と思っただけでかかわって日常生活も変わったと思える。

□ 教育実習 (幼稚園II)

とても大きな壁だと思っていたから、実習前からいろいろ準備していたし気持ちも整っていたと思う。学校でやってきたことが生かせたり準備した者が使えたりして嬉しかった。3週間ひとつのクラスに入ったことで見えた子どもの姿もあったし、日々の積み重ねで自信がもてた。紙芝居を毎日読んだことと精錬実習を終えたことが達成感。

□ 保育実習II (保育所)

幼稚園実習が終わって、ホッとしたところで、学校と休みを挟んでの実習だったからか、とても気持ちが下がっていた。でもそれはみんな同じことで、私は特に「保育所」での実習ということに不安を感じていたのだと思う。乳児への苦手意識と積極性については、保育実習Iからの課題がそのまま出た。今までの学校生活や実習（特に教育実習）を終えて人とのかかわり方を見直したり、自信がもてた部分もなくなってしまい、また落ち込んだけれど、今までのこととつなげて考えることができたのはよかった。子どもの気持ちを考えることを常に頭に置いてかかわりをもった。

□ 実習で観えた「自分」に共通しているものは何か？ 違っていても何か？

常に不安がついている。でも全部、真剣に取り組んだと思う。継続したり日々の積み重ねで徐々に自信がもてる（誰かに言われて）。普段の生活と重なる。自分自身と向き合うことが多く、とても辛くなる。良さがあまり分からない。

(2) これまでの実習を改めて考察する

次に、実習間のつながりを全ての実習の終了後に再度振り返ることを通して、自身の実習への再度の考察を試みました。さしあたって、これまでの実習終了後のレポートを読み返し、それぞれの実習についての考察を書き足しました。そして、そこから観えた自身の良さと課題について考察し、それを2年間の実習全体の考察としました。

1. 実習レポート①（1年次 教育実習（幼稚園I））に対する考察【2年次 後期】

1年生の終わりに、①1年間の学びを振り返る機会があり、レポートをよく読み返した。あの時どうしてMちゃんは私に甘え「ずっとここにいて。」と言ったのだろう。ひざの上からおりたくなかったときの気持ち、一緒に楽しく遊んでいたときの気持ちを改めて考えた。そして、6月にMちゃんのお父さんが亡くなったことを思い出し、自分のなかでなにか繋がったような気がした。

初めの2か月(実習2回)は、不安な私を支えてくれた存在でもあるMちゃん。しかしMちゃんが大人とのかかわりを求めている頃、私はMちゃんと距離をとってしまった。実習に少しずつ慣れ、『いろいろな子とかかわらなくては、』という気持ちもあったと思う。今思い出してもとても悲しい気持ちになるし、すごく後悔している。授業や先生の話で、心に残っているエピソード、すぐに頭に浮かぶ子どもというと、いつも一番にMちゃんの顔が浮かぶ。

②Mちゃんと、もう一人の女の子（Sちゃん）がよく私の傍にいて、一緒に遊んだり遊びに誘ってくれたりしたが、MちゃんはSちゃんと比べても甘え方が激しかったと今では思う。取り合いのようになって、私を遊びに誘うSちゃんにMちゃんが怒鳴ることがあった。Mちゃんが甘えてくるときの雰囲気、なぜか違和感というか、言葉にできないけれど少し変だと感じたことがある。その違いや初めの頃との変化に気付いていたら、私はMちゃんとかかわり方を変えていたのだろうかという疑問に思った。

Mちゃんの気持ちになって考えたら、Mちゃんの求めているかかわりを受け入れるべきだったのかなと思う。しかし、あの時は自分なりに考え、子どもの気持ちを考えてとった行動でもある。子どもが私にくれた気持ちを素直に嬉しいと思うこと、一人ひとりとかかわりを大切にすることの両方が必要だと思った。

もしも発表会后、最後に顔を合わせて話をする事ができたら、よく頑張ったね、今日もMちゃんのこと見ていたよということを伝えたかった。

2. 実習レポート② 【1年次 保育実習I（保育所）】

（前半部分略）子どもとかかわりでは、すべてのクラスで「もっと積極的に」と指導を受けました。（中略）③私は人前に出ることが苦手だし明るくもないし、積極性が大事と分っていてもなかなか変わらない自分が嫌でした。実習3日目の記録に「明るく、笑顔で子どもとかかわりたい。実習を通して自分自身変わりたい。」と、その気持ちを少しだけ書きました。すると数日後、その日実習担当をしてくださっていたK先生と直接お話しすることができました。実習録のコメント欄には、自分自身変わ

らなくてもいい、自信を持ってくださいと書いてありました。その時はその言葉をそのまま読んだだけだったけれどいろいろな思いが込み上げてきて、心に残る言葉となりました。

実習最後の2日間はK先生が担任の2歳児クラスに入らせていただくことに決めました。この2日間は「自分自身変わらなくてもいい」という言葉には、どんな意味があるのだろうと考えながら実習を行いました。私は自分の性格や積極性についてもたくさん悩み、考えました。たくさん子どもが集まっているところに飛び込んでいって一緒に楽しく遊ぶことも、積極的に子どもとかかわるということかもしれません。でも私は、一人で遊んでいる子の傍に行き声をかけたり、泣いている子やその子の表情から気持ちを読み取って、そっと寄り添える人になりたいです。この2日間で、それらも積極性だと考えることができました。絵本や手遊びは、大勢の子どもたちの前で楽しみながら行うことはとても緊張するし、苦手だと感じることもたくさんあります。しかし、一人の子と一対一で絵本を読むときには、子どもと一緒に楽しんでいる自分に気が付きました。そういうことから慣れていけばいいのかと思いました。自信のないことばかりだったけれど、保育者の方に、子どもとのかかわりではいい笑顔と優しさが感じられると言っていたので、その2つは大切にしていきたいと思いました。

子どもと過ごす時間を大切に、大好きな子どもとかかわることを幸せだと感じれば自然と笑顔になれると思います。子どもと一緒に楽しく遊ぶことが私が見た保育者や実習生の明るく積極的な姿だったのかもしれないと思いました。自信はまだなくてもいいと思いました。「自分自身変わらなくてもいい」という言葉にある意味のひとつは、自分の良いところに気づき、伸ばしていくこと。時にはそこに自信を持つことも大切だということ。苦手なことには小さなことから挑戦していき、自分の課題と向き合って受け止め、自分らしくいるために努力することだと思いました。

実習レポート②に対する考察 【2年次 後期】

この文章だけ見ると、私の実習は、自分自身のことや保育者とのかかわりが全てのように思えてすごく嫌になった。④これまでの実習録も子どもとのことより圧倒的に「私」の記述が多い。しかし実習を通して自分が人として成長し、そこから子どもに対するかかわり方が変わっていけばいいと思っていた。この実習では保育者としてだけでなく、もしも違う道に進んだとしても社会人になるために、また大人になるために大切なことを学べた実習だと思う。(中略)辛い実習のなかで周りが見えなくなっており、自分自身のことすらわからなくなっていた。何にも自信が持てず、とにかくこのままではいけない、変わらなくてはと思っていたときにK先生が声をかけてくださったので、話ができたときは涙が止まらなかったし本当にこの出会いに救われた。

3. 実習レポート③【1年次 保育実習（施設）】に対する考察【2年次 後期】

積極性について、保育園実習の時とは違う見方ができたと思う。⑤保育園実習の途中から積極性や自分自身について考え始め、自分がつくり上げていた保育士像（明るい、ハキハキしているなど）だけが全てではないと知った。この実習では積極的という言葉にとらわれず、自分なりのかかわりで利用者さんとの距離を縮めることができた。そのうちできるようになっていたコミュニケーションがとても自然体であり、実習が楽しかった。

4. 実習レポート④【2年次 教育実習(幼稚園II)】に対する考察【2年次 後期】

この実習では子どもの気持ちを考えること、人とのかかわりを自分がどう受け止めるかを考えた。これまでの実習で共通していた私の課題だったからだ。今までと比べて楽な気持ちで実習に入れたのは、2年生になって自分と向き合う時間（入学式の言葉、保育方法演習など）があったからだと思う。不安と楽しみが同じくらいだった。ピアノの練習やパネルシアターの作成を事前に頑張り、「絶対大丈夫」と自分を落ち着つかせていた。

子どもの気持ちを考えるという課題について、エピソード記録に子どもの姿が書かれていない。保育者と私のことがまた中心になっており相変わらずだと思った。しかし、保育者とのかかわりのなかでの自分の変化があった。保育者の目を気にすることはなく、自分に自信がないからと悩むこともほとんどなかった。これまでの私だったら、責任実習の時に保育者に伴奏を弾いてもらうことをマイナスなこととしてしか考えられなかったと思う。しかしこの時の私は、その分自分ができることを頑張ろうと思えている。落ち込んだけれど違う視点で考え直したんだと思う。

5. 実習レポート⑤ 【2年次 保育実習II（保育所）】

（前半部分略）乳児のクラスに入った時、保育者の方に指導されることが毎日同じで、明るさや積極性についてでした。そんななかでも、優しい雰囲気をもって子どもとかかわっているから、緊張がほぐれ慣れてきた頃（午睡後くらい）から子どもとの距離を縮めることができたと、私の良さも見てくれていました。自分でもそのような雰囲気をもって子どもに接したいと思っていました。積極性についてはまだわからなかったけれど、実習をしていくうちに考えていけたらいいなと思ってました。しかし、⑥日々の反省会が出る保育者からのアドバイスも、それをとらえる自分の気持ちも、1年生の時の保育実習と何も変わっていないとすごく感じました。私は学校生活やこれまでの実習を通して少しずつ、人とのかかわりやもののとらえ方が変わってきたと思っていました。でも実際は言われたことに傷ついてすごく落ち込み考えすぎてしまったり、気にしてしまうところはあまり変わっていませんでした。

実習レポート⑤に対する考察 【2年次 後期】

保育園での実習に不安を感じていた。特に3歳未満児とどのかかわればいいのかかわからないまま実習に入った。保育園だと、また保育者の目が気になってしまう気がした。保育実習Iのこともあり、実習先のせいにしていないこと、多少園や担当の保育者に左右されたとしても、子どもとのかかわりを大切にしようと思っていた。教育実習IIをおえて実習に臨む時の心構えを覚えたつもりだったが、そんなに変化していない自分がいた。今までの学校生活や実習を通して人とかかわり方を見直したことで、自信が持てた部分もなくなってしまったのかと思い落ち込んだけれど、そのように全ての出来事とつなげて考えることができたのはよかったと思う。

6. 実習レポート<全体>に対する考察 【2年次 保育実習II】

緊張と不安は誰にでもあると思うが「保育者にも子どもにも伝わる」と全部の場所で言われた。実習に慣れ少しずつ自分らしさを出すことができる。でも自分の良さはよくわかっていなくて、ただ一生懸命やっていると周り(実習担当や担任の先生など)が気付いてくれて、それが私の自信になっていった。逆に⑦アドバイスや指導を受けると、そのことばかり考えてしまい、気にする。人に良い悪いという評価を受ける前に、自分で考えていいところを見つけたり、どうしたらよかったのか反省をしていきたい。

⑧私は新しい環境に入ると、つらくなったときに場所や他の人のせいにする癖があると思う。今までの学生生活もそうだった。そういう時は人とかかわることが嫌になる。少しずつ環境に慣れてきても周りの目を気にすることは多い。自信が持てないことは周りにどう思われているか気にしてしまうことにつながる。

Oさんは、1年次の教育実習(幼稚園I)から、子どもとの距離(甘えをどのように受け止めるか)について実習で悩んだり考えることが多かった学生でした。振り返りの際、他の学生から、「もしかしたら日常でも気にしているのではないか」という意見をもらい、日常生活と実習についての関連性も考えるようになりました。1年次の終わりに「あの時どうしてMちゃんは私に甘え『ずっとここにいて』と言ったのだろう」という疑問が湧き、自分自身から観た視点でしかないことに気づき、「ひざの上からおりたくなかったときの気持ち、一緒に楽しく遊んでいたときの気持ちを改めて考えた」(下線①)と、再び考察を行いました。そして、Mちゃんの家での不幸を思い出し、「自分のなかでなにか繋がったような気がした」と振り返りました。

Oさんは、そのうちに、「MちゃんはSちゃんと比べても甘え方が激しかった」「Mちゃんが甘えてくるときの雰囲気、なぜか違和感というか、言葉にできないけれど少し変だと感じたことがある」(下線②)を再発見するに至りましたが、これは、1年次にはなく2年次になって導き出された考察でもあります。

その後Oさんは、保育実習I(保育所)で、保育士とのかかわりに躓いてしまいます。そして、実習全体が不安に包まれた時に、1人の保育士の言葉に救われることになりました(下線③)。「私は人前に出ることが苦手だし明るくもないし、積極性が大事と分かっていてもなかなか変わらない自分が嫌でした。実習3日目の記録に『明るく、笑顔で子どもとのかかわりたい。実習を通して自分自身変わりたい』と、その気持ちを少しだけ書きました。すると数日後、その日実習担当をしてくださっていたK先生と直接お話しすることができました。実習録のコメント欄には、自分自身変わらなくてもいい、自信を持ってくださいと書いてありました」この言葉で、Oさんは自分を取り戻しました。そして、「保育実習の途中から積極性や自分自身について考え始め、自分がつくり上げていた保育士像だけが全てではないと知った」「積極的という言葉にとらわれず、自分なりのかかわりで利用者さんとの距離を縮めることができた」と、継続して1つのテーマについて考えていくようになりました。その考察では、「もしも違う道に進んだとしても社会人になるために、また大人になるために大切なことを学べた実習」と位置付けた保育実習I(施設)では、「これまでの実習録も子どもとのことより圧倒的に『私』の記述が多い」(下線④)という“視点の特徴”に気づくこともできました。

しかし、最後の保育実習II(保育所)では、「1年生の時の保育実習と何も変わっていないとすごく感じました。私は学校生活や今までの実習を通して少しずつ、人とかかわりやものとのとらえ方が変わってきたと思っていました。でも実際は言われたことに傷ついてすごく落ち込み考えすぎてしまったり、気にしてしまうところはあまり変わっていませんでした」(下線⑥)「アドバイスや指導を受けると、そのことばかり考えてしまい、気にする。人に良い悪いという評価を受ける前に、自分で考えていいところを見つけたり、どうしたらよかったのか反省をしていきたい」(下線⑦)と、自らの課題が変わっていないことにも気づきました。

以上が、Oさんの、それぞれの実習間での考察ですが、実習全体を通して、「私は新しい環境に入ると、つらくなったときに場所や他の人のせいにする癖があると思う。今までの学生生活もそうだった。そういう時は人とかわることが嫌になる。少しずつ環境に慣れてきても周りの目を気にすることは多い。自信が持てないことは周りにどう思われているか気にしてしまうことにつながる」(下線⑧)と、日常生活との共通性、自身の持つ課題や傾向、周囲の人との関係性などについて課題を挙げることができました。

こうした取り組みの中で、特に「これまでの実習をまとめるコース」では、Oさんのように自身の実習を振り返り、そこから良さと課題を見つける作業を行いました。なかには、ゼミの卒業レポートとつなげてさらに深く考える人もいました。こうした学びは自分自身を社会人となり働く自分へつなげていくのだと考えます。これからもこうした「実習をつなげる」こと、「実習から自身の良さ・課題を見つける」ことを粘り強く行っていきたいと考えています。



▲ 1月27日「保育・教職実践演習」発表の様子

3月の予定

3/5~6

保育実習Ⅰ事後指導（1年生）

3/5

研修生相互見学会（明德そでの保育園）

3/7

研修生スクーリング

3/8

研修生「学びの成果報告会」
一般入試

3/15

第43回卒業式

3/22

スターバックスお話ライブ
保育セミナー（明德土気保育園）

3/29

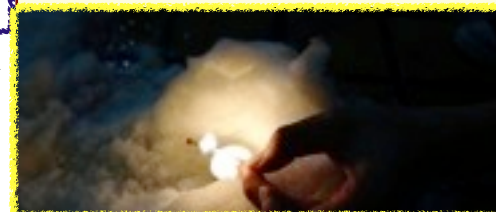
オープンキャンパス
保育セミナー（明德そでの保育園）

3/31

新2年生 新年度ガイダンス



▲保育実習Ⅰの合間を縫って、子どものように雪と遊ぶ1年生たち。最初は単に雪合戦で遊ぶ姿でしたが、最後にはろうそくを灯した幻想的なかまくら作成に至りました。「遊び」が遊びながら発展していく様子が見られます。



編集後記

1月・2月は、「現代社会論」合同発表会に「保育・教職実践演習」発表会、そして「学びの成果発表会」と、これまでの2年間の集大成となる2年生の発表が続ききました。

金ゼミの取り組みと由田ゼミの「学内ゼミ合宿」を本紙ではご紹介しましたが、「学びの成果発表会」前日に学校に泊まり込んで発表内容を練った山野ゼミ、夏の奥多摩でのキャンプを経て語り合い続けた伊藤ゼミ、ひとりひとりが編んできた物語を一冊の本にまとめて朗読した深谷ゼミ、話し合いの内容を身体表現として作品化した田中ゼミなど、発表内容もですが、その準備の姿勢（過程）にも、それぞれのゼミの特色が表れていました。発表だけが「成果」ではなく、その発表に向けて取り組んで来たことも「成果」でしょう。2年生は新たな道があと1ヶ月で始まります。今まで自分が取り組んできたこと・向き合ってきたことに自信を持って、前を向いて歩いていきたいですね。（田中）

発行：千葉明德短期大学

千葉市中央区南生実町1412

Tel:043-265-1613

Fax:043-265-1627

mail:tandai@chibameitoku.ac.jp

URL:http://

www.chibameitoku.ac.jp/tandai.html

編集

田中 葵

深谷 ベルタ

鶴田 真二

読者の皆様へ：『月歩学歩』に対するご意見、ご感想をメールにてお寄せ下さい。